

赤穂浪士

上 卷

大佛次郎

赤穂浪士

上 卷

大佛次郎

光風社版

赤穂浪士

上巻

昭和三十八年十二月十五日 初版発行
昭和三十九年一月十日 再版発行

定価 三二〇円

著者 大佛次郎
発行者 豊島清史
印刷者 氷川印刷株式会社

発行所 株式会社
光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(五)〇二三八番
振替東京五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

暗	松	乗	歩	元	予	意	關	梯	花	蔭
	の	合	一	禄		地	の	子	の	を
闘	廊	舟	歩	屏	感	と	世	段	雨	男
	下			風		必	界			

二	一	金	八	查	六	五	五	七	七	七
三	〇									

主	浮	千坂	大石	女郎	昼	水	手	先	籠城	灰
		兵部	内蔵助	蜘蛛	行	の			と殉死	文
従	草				燈	上	紙	手		字

二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

装 幀 佐 多 芳 郎

赤穂浪士 上卷

蔭を歩く男

將軍が退出になったのは暮六つ近い時刻である。警衛がとかれると同時に、待ちかまえていたように外の群衆が雪崩入って、境内を埋めた松の間に白いほこりが煙のようにもうもうと起こった。その上から、傾いた陽が斜にさして、濃淡の分れた光の柳条を一面に降らせていた。関東新義真言の大本山、護持院の七堂伽藍は、この夕陽の中に松と桜とをめぐらせて燦爛とつらなっている。

空は広々として絹をひろげたように明るい。「鐘一つ売れぬ日はなし」という江戸の春である。人々は青い松の間を行く莊嚴な鹵簿の、槍、挾箱、打物、柄傘などが日にきらめくのを遠くから見ている。

公方様のお日和じゃ。と誰かいつていたが、聞いただけの者は晴れ晴れと微笑してこの太平な時世に生まれたことをこの上ない幸福のように考えずにはいられなかった。境内には、護摩のにおいが放縦に思われるま

でに漂っている。千手堂、聖天堂、大師堂、常行堂と人波の動くところに、燭火は輝いて、真言神秘をつつむ厳やかな堂内の幽暗に、金色の扉帳をひらいた仏龕を浮き上らせている。朗々たる読經の声は、香煙とともに堂に溢れて、夕陽の空にのぼる。その調和ある音声の高低にあわせて、厳やかな豪奢と華やかな敬虔の気が人々の頭上に花紋を描きながら、ゆるく鷹揚な波動を江戸一円の空に送っているように思われた。大門をくぐって入り堂と堂とをつないで動いている群衆も花を水に浮かせて見るように、色さまざまにたとえようもなくはなやかだった。度々の華奢の禁令も、熱れきった時代の空氣の醗酵を止めることは出来なかったと見える。程よい日光と濕氣とを得て花は咲くよりほかになかったのであらう。紫、浅黄、紅打などの染綿の帽子、袖口に針金を入れ綿を厚く入れてふくらみをとる工夫までして美しく丸くきつた袖も軽々と、吉弥結びに帯を結んだ女達、流行の小太夫鹿子、千弥染はそこにも、ここにも見受けられる。男も、紅鳶、縹、茶、空色などの羽織、下着の緋無垢、着物の裏にも燃えるばかりの紅絹をつけたのが多く、熊谷等のお武家

の後には鎌ひげつけ毛脛を出した奴がお供、さては黒縮緬のひとえ羽織を着たお医者など、師宣の絵から脱け出して来たといえ一番わかつの早い、華者をつくし優婉の限りの姿をした男や女達が、いきいきとして話したりほほ笑んだりして間断なくざわざわいう足音をきかせながら、この色の波を動かして行くのである。

その若い浪人者は、大門の脇に立つてこの雑沓を眺めていた。

他にも道の脇へ出て通る人間を見ているものは男女ともが多い。が、この若者の切長の目にはどこか人と違うものがあつた。齢は二十を出たくらいであろう。鼻筋がとおつて彫の深いはっきりとした顔立をしている。服装を当今風にさせたならば、あるいは人目をひくだけの美貌ではなからうかと思われる。が、顔全体の表情が、齢に似ずおっとりしたところがなくて、けわしいといいたい位つめたく牙えて見えた。目付がそれを代表している。切長の、はっきりとした美しい形をしているが、この華やかな雑沓を眺めても他の者のように浮いた色を見せることもなく、終始、水のように

ひやかかな一色に止まっている。いや、時にその冷たい色が凝と重なり合つて来て、冬の水の底にきらりとする魚のうろこのように色なく閃く時がある。その刹那に、肉の薄い形のいい唇が、隅のところで心持反つて、さげすむような微笑を含むのである。

「あ、あすこへ来た男を知っているか？」

傍で、それまでも何か話していた商人風の二人連れの一人が急にこういったので、若者は聴耳を立てた。

「ど、どれ？」

「それ、そこへ……奴を連れて、いやに威張つて来る男さ」

男があごでさす方角を、若者ものび上るようにしてのぞいて見た。

「ふうむ、知りませぬな……どこかの御典医ですかな？」

と連れは怪訝らしかつた。

話題にのぼつていた男は、実際、御典医らしい風采で、その豪奢で寛濶な姿には人目をひくものがあった。供には、奴のほか、弟子らしい男がこれもお古を頂戴に及んだらしい黒縮緬の紋付をぞろりと着て、う

やうやくしく跟^{ついて}いる。

「知らないのか？ あれが箸屋の伝助という男さ」

「箸屋の？」

「野暮な声をしなさんな。きこえたら尋常なことでは済みますまい。もとは箸削りでも、今はれっきとしたお犬医者、減多なことをいうて見なさい。遠島で済めばよいが、二つとない笠の台が飛ぶかも知れぬ」

と、ひそひそという。

若者は、無論きこえない振りをしていたが、「ははあ」と思つたらしく、ちようど前を通り抜けて大門をくぐつて行く医者の後姿をずっと見送つた。例のつめたいあざけりを含んだ微笑が、静かに唇に匂つていたのである。

箸屋の伝助という男の突飛な出世振りは、ひと頃二人以上人間の集まるところではどこでも噂の種にされたものだ。誰も、口ではさげすんだようにいいながら内心は伝助の幸運をうらやんでいたのに違いない。伝助のように短日月の間に目も鮮かな出世を見せた者は何時の時代にもそう減多にあらうとは思われなかったからだ。それというのもずっと以前からの生類憐愍^{とくねん}の

御布令^{おふりょう}からだつた。これもこの護持院の大僧正隆光が信心の念篤^{こころのこころ}い將軍家にお勧めしたからだという。生類の中でも、犬が、將軍綱吉が戌^{いぬ}の年だからというので特別のまるで氣違^{きちがひ}いじみた保護を受けることに成つていた。野良犬を殺したからといって死罪になつた者は珍しくない。飼犬が子供を生めば強制的に一々毛色まで書いて届けさせる。役所には市中の犬の戸籍がちゃんと出来ているし、野良犬を收容するために中野に周圍百町もある囲い地を作り犬小屋を建てた。小屋は柿葺^{かきぶき}の屋根で天井にも床にも板を敷いた立派なものである。炊出し所がある。役人番人の小屋がある。日々役人付添いの上でかなりの人数が節のない檜^{ひのき}で作つた箱に綿の厚い蒲団を入れたものを担^{かか}つて市中を歩き、野良犬がいれば丁寧^{ていねい}に収めて中野まで荷なつて帰るのである。小屋へ行けば毎日炊出しをして不足なく食事をさせる。犬一匹一日に白米三合、十匹について一日味噌五百目、乾鰯^{ひか}一升ずつときめてあつた。勿論病氣になれば小屋に医者が二人いて直ぐと手当てをしてくれるのである。

この箸屋伝助というのは、麴町三丁目^{こうじょうさんちやうめ}で箸削りを生

業として、しがない暮しをしていた男だったが、近所の犬達で病氣になったものに薬をこしらえてやったところが、それがよく利いたという評判がお上にきこえてから数年前大医者に取り立てられて地所の付いた屋敷まで拝領することに成った。患者があつて迎いがあれば、もののしく駕籠に乗って診察に行くのである。

箸屋伝助改め丸岡朴庵の後姿は、やがて大門の内に消えた。若者のくちからも、例のなぞのような微笑が消えている。寺ではちょうど暮六つの鐘をつきはじめている。

若者は黙々として雑沓の中を歩き出した。

將軍の幾度目かのお成を仰いで光榮に輝いたこの護持院が、その夜危うく猛火になめられようとしたのである。最初火を見つけたのは、その頃鎌倉河岸の脇に住んでいた仙吉といつて相当名のきこえた御用聞きだった。

仙吉は、麴町に用があつて、更けてから寂しい濠端

を一人で帰つて来たものだったが、護持院の土塀に沿つて、一層暗い道を歩いていると、行手の土塀の内側がぱつと明るくなつて、その一角の樹立の青い色と堂の丹塗の色を闇に浮かせながら、火の子があがつて、ぱちぱちと物の燃える音がきこえた。

まさか放火とは気がつかず、焚火だとはかり思つていたのだが、その途端に土塀の上に黒い人影が現われてひらりと外へ飛び降りたのを見ると、ぎよつとして身体をかたくしながら、流石に稼業で、急に地にうずくまつて様子をうかがつた。幸いと、その人間はこちらへ歩いて来る。二本差している……と見るか見ないかのうちに、

「火事だ！」

という声が土塀の内側で聞こえた。

はつとした時、向うは、すたすたと急ぎ足で通り過ぎようとするのだ。

仙吉が、地を蹴つて立つ。と同時に、武士の方でも急に人の気配を知つて振り返る。

と見て、

「もし！」

と軽く何でもなような調子で声をかけたのは、流石に呼吸を心得たもの、相手の出端を巧みにはずしたのだ。

「鷹匠町へまいるには……どうまいったら宜しゅうございましょう……」

相手は確かにまごついて、咄嗟の措置を取り損じたのだが、

「鷹匠町か？」

と聞き返しながら、これも曲者、仙吉に右へ廻る気配を感じると、つと体をひらきさま抜き討とうとしたが、それを感付かぬ仙吉でなく、急に飛びすさって、

「危ねえ！」

と叫ぶと一緒に、繭から出た糸のように仙吉の手から走り出た縄が、武士の頭上にきりりと舞って、腕にからんでいた。

「むむ」

夜目に白く蠅と刀身が流れる。よろめいて仆れるばかりのところ、仙吉は踏み止まった。

その間にばたと相手は駆け出していたのだ。

「畜生！」

と唸る、

手首から斬られた縄の端をかなぐり棄てて、早速に自分も後から駆け出していた。

護持院では今、頻りと火に水を掛けているらしい。わいわい騒ぐ声の間にざぶんざぶんと水の音や、何かでたたいている音がきこえている。幸いに見付け方が早かったのと、何しろ護摩堂に綱吉自筆の『護持院』の額があつて、その非常の場合の立退きの用意として役夫料三百人扶持を受けていたことなので、手も揃っていたと見える。火は縁の下をこがしたぐらいで大事にならず消し止めることが出来た。

過失ではない。あきらかに放火である。將軍家の帰依浅からぬ護持院を焼こうとしたとは、容易ならぬ事件だった。

間もなく知らせによつて寺社奉行が馬を走らせて来て、暗い樹立の間を提灯の灯がいくつも飛んで来ていた。

組橋へ出るまでに、武士は、駆けながら刀を鞘に

おさめていた。

ちよつと立ち止まって、振り返って、闇の中に近寄って来る足音を聞くと「うるさいな」というように舌打ちしたが、また走って、角を曲るとかたわらの路地の木戸を押した。

木戸はゆれながら開いた。

直ぐと、内へ入ると、今度は、もとどおり内側から木戸をしめた。

間もなく、仙吉が息せき切って駆けて来たが、この町角まで来て、はたと途方に暮れたように立ち止まった。

途は三本に別れている。

地面に匍はうようにして、蹠しおがんで、闇を透かして見たが、目あての人影は見えなかった。

すこし先に、自身番小屋があつて、闇の中にぼーっと黄ばんで明るく、障子が見える。

仙吉は急に思い立ったように、そちらへ駆けて行った。

「爺ととつあん、爺ととつあん……」

と寝込んでゐる番太を起こしているらしい。

その間に、こちらで木戸が音もなくあいて、先刻の武士の姿を吐き出した。

武士は足音を忍ばせて橋を渡った。それから、また急ぎ足になって間もなく九段坂を登ると、馬場を右手に三番町通りを歩いて御麩谷おんまゆだにへ降りて行った。

黒板塀が陰気につづく、屋敷町の深夜はひっそりとして夜気が時々立木のこずえを動かすだけである。武士は黙々として歩いて行つて、とある屋敷の前に立ち止まると、そつとくぐり戸を押して見た。

あかないのを見て、

「佐助！ 佐助！」

と近所を憚るような低い声で呼ぶ。

門番小屋の窓を灯影が明るくした。間もなく、がたぴしと戸の開く音がする。

「どなた様じゃ」

「私じゃ」

ぎーッと、重い音をたてて潜戸があいた。

「気の毒したな」

武士は、こういって、内へ入った。

直ぐと正面に玄関がある。しかし、武士はその右手

にある木戸をおして、暗い庭に入った。かなり広い、樹立の深い庭である。

雨戸を閉じてしんとしている母屋について廻ると、繁みの奥に小さい離屋がある。

武士はそばまで来てからまた低い声で呼んだ。

「母上……母上……」

直ぐと、雨戸の内側に人の気配がして、雨戸があく。

「隼人か？」

「左様にござりまする」

「今、燈火をつけます」

いそいそとうれしそうな顔が暗い中でも想像出来るような声音であった。

「いえ、……御寝みになっておいでたので御座りましよう。こんなに遅く申し訳御座りませぬ」

こういいながら、武士は頭巾をぬいで、衣服の裾のほこりを払いにかかった。

間もなく雨戸のすきからもれて来たやわらかい灯影は武士の横顔を明るくした。これは今日の夕方護持院の雑沓の中に立っていた若い浪人者である。

「ほんに、三日も四日もたよりがないのでどうおしかと思うていた」

母は、ぼんぼりを差し向けながら、また、こういつた。

「お腹は空いていないのかえ」

母は、久し振りで来た息子に、三日分も四日分もたまつていた慈愛を一度に振り撒こうとして心をくだいている模様だった。

「もう、火も消えかけている。お湯もさめている……」

「いえ、何も欲しくはありません。早く寝みたいと思います」

と答えてまた急に、

「叔父上は、また御立腹で御座りましような」

「いえ……」

と当惑顔で、

「お前が来たら何か話があるとはおっしゃっていられた。家を出たきりにして無沙汰にしておいでなのをよくは思っていないしやらぬようだ」

「でも、家にいても仕方ありません。叱言をいわれる叔父上が御無理じゃ。今の世の中は働きたいにも遊ん

でいなければならぬように出来ている」

隼人は、寂しく微笑しながら、

「知恵があつても、腕があつてもじゃ。……いつそ犬医者になつて犬の脈でもとりましようか？」

「馬鹿をおいいでない」

母は、息子の冗談とも真面目ともつかぬ語調に驚いたらしく、こういつてから重苦しくだまり込んで火鉢の灰に眸を落とした。

「いえ……決して馬鹿になりませぬ。今日も護持院で一人見ましたが、いや、なかなかの勢いで御座ります。今の世の中で暮しいいのは商人と犬とで御座りましょう。武士ならば家柄と身分とが入用で御座います。それでも商人の金の力に頭を抑えられます。両刀たばさんでおめおめと野良犬の番人をしている者も御座ります」

「それでも、何時の世になろうとも武士ばかりがまことの人じゃ。商人ずれが如何に成り上ろうと比較にならぬ。商人は石川六兵衛ほどの金持でも、贅沢が分に超えたというので欠所になったではないか。上に武士あつての民百姓じゃ」

「さて、いつまで、このままでおりましよう。世の中は人も知らぬ間に変わりまする」

これはむしろ、その変化を望んでいるような口吻に聞こえたので、母は再び驚きの目をみはって、無言で隼人の顔を見詰める。隼人は冷やかな微笑に唇をそらせているのである。

「ほんに、お父様が昔のとおりでいて下すつたなら……」

と思わず女らしい愚痴が出る。

「いや、おっしゃいますな。私は、父上がおなくなりになったのは父上のお倅せだと思つております」

「何といやる？」

「御立腹なさりますな。これは、まことのことで御座ります。父上のように一徹な武士氣質の方が如何して今の時世に向きましよう。父上に犬の番が出来ましようや、また今の世間では極く当然のこととされていくる賄賂を、何で、あの清いお心持に我慢なされましようや。三河武士は名のみ、形のみ。まことの武士がだんだんと住みにくくなる御時世じゃ。これを世間が悪くなった故とは思ひませぬ。こうなるのが自然の勢い」